

[文献名] 座談会 朝鮮労務の決戦寄与力

[収録雑誌] 大陸東洋経済

[作成年月日] 1943年12月1日 ただし座談会開催は1943年11月9日

[原本所蔵機関] 東京大学経済学部図書館など

[復刻等] 2001年に龍溪書舎から復刻。

[注] 読みやすさを考慮し、一部、仮名遣い、漢字を改めている。

座談会 朝鮮労務の決戦寄与力

十一月九日・於京城

出席者（五十音順）

日室総務課長 池田饒

朝鮮総督府農産課技師 石井辰美

朝鮮無煙炭労務主任 今里新蔵

東拓農業課長 庄田眞次郎

朝鮮総督府労務課事務官 田原実

鐘紡厚生課朝鮮出張所長 別役雄久馬

小林鉱業企画室勤務 松本重業

朝鮮土建協会理事 森武彦

朝鮮総督府文書課長 山名酒喜男

本社側 小倉支局長

綿野編集局長

まえおき

記者 お忙しいところをお集まり下さいまして厚く御礼申し上げます。

本日の座談会の趣旨は、すでにだいたいご了承のことと存じますが、戦局がだんだん熾烈となり生産戦、消耗戦という段階に進みつつある今日、一番の問題は何と申しましても労務の問題であると思います。内地では十七職種の男子使用制限を始めいろいろ今までにない思い切った措置を実行しつつあります。この情勢から見ますと、朝鮮にはまだまだ労務供出の点で我が国の戦力に寄与する余地があるのではないかと思われれます。

しかし、翻って考えますと朝鮮にはいろいろな特殊事情がございます。一面において、朝鮮自体にも工鉱業を発達させて行かねばならず、反面また食糧増産の見地から相当労務が要ります。

そこで、朝鮮は内鮮一体の趣旨に副って、果たしてどれだけの労務を供出する余地があるのか、現状は一体どうなっているのか、こういう点について今夕は皆様ご専門の方々の

ご意見を一つゆっくり拝聴したいと存じた次第です。

労力過剰から不足へ

記者 では皮切りに山名さんから、朝鮮の労務問題の基調と申しますか、最近のいろいろな統制を必要とした経済事情の変化について一つ……。

山名 労務統制の裏の経済事情の動きを概略説明いたしましょう。併合当時朝鮮の人口は千三百万人程度に過ぎなかった。それが現在では、内地満州その他の地域にいる者も入れての合計は二千六、七百万人に増加している。非常に激しい人口の増加ですが、これはつまり、施政以来官民挙げて努力した、農業生産力の拡充が成功した結果です。もっとも昭和三、四年頃になって、この止まるところを知らぬ人口増加を、将来朝鮮の農業が賄ってゆけるかどうか、ということが問題になってきた。当時朝鮮の農村は窮貧のドン底に呻吟し、労力は非常に過剰な状態だった。そこでこの朝鮮農村に目をつけたのが内地の企業家—なかでも紡績業者だった。朝鮮には、蚕繭や綿花がとれる。内地で賃金の高い労力を使って仕事をするよりも、この蚕繭や綿花を原料として朝鮮農村の未だ開拓されない低賃金の婦女子を使って仕事をやった方が利潤が挙がる、というのでまず紡績企業家が目をつけたわけです。そして過小農の多い、かつ気象条件のいい中鮮から南鮮にかけて、内地の紡績企業家が進出してきました。

もっとも昭和七、八年—つまり宇垣総督時代になってから以後は朝鮮の地下資源の開発—産金事業に重点がおかれ農村の余剰労力を産金事業に吸収するという政策がとられた。

百姓も、農村で貧窮に喘いでいるより金山で働いた方が儲かるというので、相当鉱山労働へ転換してゆきました。

一方、その頃朝鮮農村の余剰労力は、内地にも進出していました。主として土建労務の方面ですが、まだ内鮮関係の熟せざるときだったので流入朝鮮人は内地の各社会層にいるような摩擦を起こした。そこで内地から閣議決定その他によって、朝鮮人の内地進出は内地の労働事情を圧迫して困るから、あまりよこさないでもらいたいという要望が起こった。朝鮮ではやむを得ずこの労力を満州に向けましたが、とにかく当時の朝鮮には労力が剩っていました。

半島労務の新使命

山名 ところが、さて戦争が始まると内地の労務事情は急に逼迫し、特に時局産業部面には著しい労力不足が見舞うこととなった。勢い内地からは米と一緒に労務者ももらいたいという要望が朝鮮に対して起こり、朝鮮でもこの要望に答えて、労務を供給する事となった。が、当初は朝鮮にまだ組織化された供給機関がなかったので、自然流出労務の斡旋をするに止まった。しかし今日では、朝鮮でも農業生産力の増強、地下資源の開発、水力

電源の開発、重化学工業の拡充といった分野で鮮内労務の需要が急激に殖え、労務問題は国民動員を必要とするまでに切実となってきました。

朝鮮の国民動員はまず第一に大東亜建設に忠誠勇武なる人的資源を供給する事を目的として、さきに陸軍志願兵制度を布き、また徴兵制度を確立しましたが、第二に生産力拡充のため大量の産業戦士の需要に応えねばならず、更に第三には、北辺鎮護の基石としての国民動員―満州移住の要請にも副はねばなりません。かくてここに朝鮮労務に対する積極果敢な対策が必要となってきたのであります。

記者 次にそうした基調の上に、朝鮮の労務統制がどういうふうに展開してきたかを田原さんお願いします。

田原 労務はもとより、時局下総てのことが国家総動員の立場から内外地一貫して統制されるという建前になっておりますので、現代までの統制は内地と朝鮮、また朝鮮以外の外地も、だいたいにおいて国家総動員法に基づく勅令が同時にしかもだいたい同じような内容で実施されております。

朝鮮の特殊事情

田原 ただ、ここでお断りしておかねばならぬのは、朝鮮には特殊事情がありまして今日まで労務統制にも内地とは多少異なった点があることです。一例を申し上げますと、支那事変勃発以来、最初は従業者雇制限令、次に移動防止令、さらに今年になって労務調整令に変わり、次第に強化されてきた移動防止法規で、内地の場合は男も女も統制の対象にしておりますが、朝鮮では女子を除いて、男子労務者の移動のみを取り締まっております。これはご存じの通り朝鮮には女子労務者というものがそう大しておらないからです。また内地においては今日まで非常に膨大な数の国民徴用の発動を見ておるのであります。朝鮮ではいろいろな関係がありまして、現在のところ軍関係に若干の徴用を実施したほかは、民間工場鉱山にはまだ徴用を実施しておらないのであります。

以上は運用上の相違ですが次に内地で実施されて、朝鮮で実施されていない法令には重要事業場労務管理令と国民労務手帳法があります。こういう高度の統制は朝鮮の実情からいってまだ早過ぎます。と云いますのは、重要事業場労務管理令は、いわば労務の国家管理を明文化したもので、これをやるには中央及び地方に政府のしっかりした労務監督機構がなければならぬ。内地には府県庁のほか厚生省直轄の労務監督事務所が各府県に置かれ、これが府県知事と一緒に労務管理に参画しているからできますが、朝鮮には道知事以外にはそうした機構がありませんので実施できません。また労務手帳法の如きも、膨大な労務手帳の交付に要する事務の繁劇、鮮内の寥々たる職業紹介所数、鮮人労務者が一般に未だ字の書けぬものが多いこと等を考慮すると、朝鮮には未だ時期尚早だし、やっても効果がないという事で実施しておりません。だいたいこうした差異があります。

記者 今、いろいろな事情で徴用はやっていないというお話でしたが、そのいろいろな事情というのは……。

田原 早く云えば朝鮮は、今まで労務の充足が容易であった。従って徴用しなくても済んだわけです。同時に技術的にも困難がありました。現在徴用を最も必要とするのは鉱山労務ですが、鉱山労務はご承知の通り相当の危険を伴い徴用労務者に災害が多いという事になりますと、これは重大問題です。それに朝鮮人労務者の移動癖には定評がありますが、万一徴用した者に逃走などされた場合、法の威信を傷つけるという虞れもありまして……。

募集機構の不備

記者 そうすると今まで労務の供出はどういう方法でやっておられましたか。

田原 従来の工場、鉱山の労務の充足状況を見ると、その九割までが自然流入で、あとの一割弱が斡旋だとか紹介所の紹介によっています。ところが今日では形勢一変して、募集は困難です。そこで官のカー官斡旋で充足の部面が、非常に殖えています。

ところでこの官斡旋の仕方ですが、朝鮮の職業紹介所は各道に一カ所ぐらいしかなく組織も陣容も極めて貧弱ですから、一般行政機関たる府、郡、島を第一線機関として労務者の取りまとめをやっていますが、この取りまとめがひじょうに窮屈なので仕方なく半強制的にやっています。そのため輸送途中に逃げたり、せつかく山に伴われていっても逃走したり、あるいは紛議を起こすなどと、いう例が非常に多くなって困ります。しかし、それかといって徴用も今すぐにはできない事情にありますので、半強制的な供出は今後もお強化してゆかなければなるまいと思っています。

記者 現在労務充足に一番苦勞しているのはどういう方面でしょうか。

田原 一番困難なのは鉱山特に石炭山です。石炭山の労務が完全に充足できれば、朝鮮の労務問題はまずまずというわけです。が、それができない。ちょうどザルに水を入れるようなもので、せつかく斡旋してつれていっても、すぐにパッと逃げてしまう、これをどうすれば充足できるか。どうすればその移動防止ができるかということ、今まで官民ともに考えてきたのですが、なかなかうまくゆかない。徴用令を発動するのは最後の方法でこれは内地もまだやっていません。なぜかというとなら山作業は生命の危険率が高い、そこに徴用者を入れることは民心に非常な悪影響を与えるからです。しかしわれわれの考えとしてはもう今はそうもいってられない。今は万全の措置を講じた上で鉱山労務も徴用

しようではないかというので、中央政府とも交渉してだいたい了解を得ています。内地も朝鮮がやればやる、という機運になってきているのではないかと思います。

記者 現在はブローカーのような者が募集しているわけですね。

田原 いや最初は各工場の担当者が集めたが、それがうまくゆかなくなって官斡旋にした。ところが官斡旋になると石炭山に働こうというものは殆どない。そこで愛国心にうったえるためいろいろと行政上の措置をこうじましたが、第一線では頭数だけ揃えればいいというので不適當な者を多く加えるという弊害が多くなってきました。そこでこれもいかん。やはり自分の方から出て行って、本当に働きたいという者を集めたい。がそれには募集手続きがうるさい、この手続きを止めてくれぬかということになったので、募集手続きは要らんが、しかし、勝手に募集はさせない。官の斡旋という形にして、特別斡旋制度というものを作り、今年の春から実施しています。

問題は量よりも質

記者 労力不足はどの程度ですか。鉱山の方が特に逼迫しているとお話ですが、今里さんから石炭山の現状を……。

今里 私の方は予定計画を遂行するのにいま約〇〇名の労務者が不足しております。これをいかにして充足するかについては、総督府や各道にお願いしたり、また支那人、囚人を使ったりして努力しておりますが、なかなかその充足ができないばかりでなく、却って減少傾向を示しています。時局柄、どうしても無煙炭を増産しなければならぬので、まず現在では労務者を募集するというよりも、移動防止に力を尽そうじゃないかということで、その方に真剣になっております。

森 私のほうの土建状況から現在の需給状況を申し上げますと、全鮮で土建に使っておる労働者は日に二十五万人から三十万人が最大ではないかと思う。平均してだいたい二十万人ぐらいですが、この労務者をどういう風にして集めておるかとお申しますと、いわゆる閑散人夫として、業者の手持で始終連れて歩く土建専門の人夫、これが現在五万そこそこです。それから工事を起こす現場の近くから集まってくる地方民がまず三万そこそこ、合わせてだいたい八万位は得られます。そこであとの十二万はどうなるかという、これは全部官の御斡旋によるものです。つまり総督府に御斡旋願うのがだいたい四万人から五万人、道内で斡旋していただく勤労隊が約八万人、合わせて十二、三万人です。

先程徴用というお話もありましたが、私の方で官に斡旋して戴いている十二、三万人は殆ど徴用に近い行政上の強力な勧誘で出ております。もしこれがうまく行けば、必ずしも徴用をせんでも、このほうがよいようです。

ただここで私どもの看過できないのは、今の閑散人夫という土建専門の労務者五万人そこそこが、昭和十一、二年頃より幾分少ないことです。これは何を意味するかというと、結局腕に覚えのある土建専門の労務者は鮮外に流出して、全然未経験の主として農村の余剰労力であると補っているということです。従って能率も遙かに落ちます。現在は恐らく事変当初の半分位しか働けぬでしょう。それに移動が問題です。炭坑方面よりは幾分少ないがだいたい三割から四割に上り、今年になってから特に多いようです。

記者 量の不足よりもむしろ質の低下が問題というわけですね。池田さんの方はいかがですか。

池田 私の方の頭痛の種は必要なだけの数が得られないのと、移動が非常に多いことです。去年などは入ってきた労務者が、年内にほとんど全て出て行ったという有様です。これは官斡旋で来た者が大部分ですが、縁故募集で来ましたのは歩留りがよく、半分位止まります。結局労働意思のない者を頭数だけ無理に集めて来ても無駄という感じがします。あまりに移動が激しいので、現在ではちょっと匙を投げたというか、出る者は追わず（笑い声）という形になっておりますが、何とかしてこれを止める事ができたら能率もぐっと挙がるでしょう。

記者 移動の原因は……。

池田 一半の責任は工場にもありましょう。例えば住宅が完備していないとか、住みよいように施設ができていないとか。そういう点は総督府にもお願いして住宅を建ててもらい物資の配給も特によくして戴いておりますが、なかなか朝鮮人労務者の移動は押さえ切れません。

結局、徴用をやって戴いて、工場はその徴用労務者各個に働く意志を植え付ける事が肝要と思ひまして、精神訓練をやったり、いろいろ精神方面から教育をやらしております。

能率は訓練次第

田原 移動防止対策としては物的方面ももとより必要ですが、根本は労務管理にあると思います。食糧、石鹼、タオル等の作業用物資の不足が有力な移動の原因になっているのは事実で、本府でも来年一月頃からこれらの物資を本府の直配とし、事業場を各個に指定して重点配給をすることにしておりますが、問題は労務管理です。朝鮮の労務管理の実情は内地より十年も二十年も遅れているといっても過言ではありません。が、労務管理をほんとうにやろうとすれば熟と実行力が必要です。これに着眼して立派な労務管理者を育て上げ、之に十分の力量を振るわせる様にするには、まず工場の重役、幹部の頭から叩き直して行く必要があると私は痛感しています。

山名 私はこういう感じをもっております。お話のように移動がどこでも激しいということは、それだけ漂っている労務者の多い証拠で、これがある程度止まって、稼働率が

5%か10%上がってもたいしたものだと思います。だからどうも手がつけられぬといって諦めておってはいかんのではないかと思います。

朝鮮の労務者の質が落ちるのは、今まで野放しで使っていたからで、使う側に内地程度の心構えと親切心があったら、少しはよくなると思いますね。朝鮮の労務者は教育しながら使っていく気で錬成などにも相当費用をかけて行くべきです。

松本 確かにそうです。朝鮮人労務者の質は低く、普通に内地人労務者の六、七割ではないかなどといわれていますが、これは訓練次第です。私の方の山の経験から見ましても、労務者の使い方の巧みな労務管理者のいる所では、移動も極めて少なく、能率の点でも決して内地人労務者に負けません。ただ私六、七年間実際に労務者と接触してみて適切に感じましたことは、朝鮮で労務管理をする場合、福利施設の如きは内地のものをそのまま機械的に移したりしてはいけません。賃金制度ももっと単純なものでいい。その代わり、労務者の持っている鋭敏な本能的な感情心得ていて、親身に面倒を見てやる必要があると言うことです。

田原 幹旋労務者のよしあしは訓練によってだいぶ違いますね。内地の鉦山統制会の報告によると、内地の相当多数の鉦山では、費用もかかるのではじめは訓練もせずに使ったところが、移動が激しく、能率が落ちる。そこで第二回目の集団労務者から、6ヶ月の訓練期間を設けて訓練をやり出した。そうすると訓練を受けた者と受けない者とは、能率その他の点に非常な差異ができてきた。その後訓練を積極的にやった結果、今日では朝鮮人労務者は内地人労務者より稼働率がよく、平均90%以上になって好評を博しているということです。

労務管理の要諦

池田 これは一例ですが、現在官幹旋等で入ってくる労務者、ことに南鮮からの連中は布団を持ってこないのです、蒲団の世話までしてやらなければならない。最近では棉がないので……。

山名 それが問題だが、朝鮮の百姓は蒲団にくるまって寝ておるか、というとそうではない。すべて内地的考えでやろうとするので、その間がピタッと行かないのではないでしょう。

ぼくは労務者を入れるならば家族も共に連れて行き、師範学校出のキビキビした女教員でも雇って指導者とし、まず家庭から指導して行かなければならんと思う。そうすることによって労務者の家族の心を掴み、労務者が落ち着くように仕向けて行くべきです。それは廻り遠いようだが却って早道ではないかと思います。

今里 家族を持っておる者は移動しないが、しかし、来るのは一人者が多いのです。

山名 内地の工場の行き届いた管理の仕方と朝鮮のものとは雲泥の差がある。

池田 反駁して何ですが、内地に行く者は選ばれて行くのでその意気も違うのではあ

りませんか。

森 内地に行っている労務者は比較的質のよいものではないですか。

田原 必ずしもそうではありません。

道の当事者に言わせると、内地においてもやはり管理のいい所と悪い所とあるが、一般的に言って、斡旋労働者が離散場合に内地の業者はやって来て、どうも逃がして済まないというが、朝鮮の業者はそうじゃない。逃げるような者を斡旋して困りますな（笑声）というそうです。そこに気迫というか、その違いがあると思いますね。

森 土建の方の経験から見ますと、班長というような、直接労働者を指導する者のよしあしが大事です。

先程からお話のあるように労務者には文字の分からないものが大多数です。そこで雇用主の方で、こういうことをやってやろう、ああいうこともやろう、考えても、それらの人の感情と労務者の感情がよほど離れておる。いわゆる感情の融合、感情の共鳴というものがない。そこで親切にしてもそれを感じ取るに至らない。ところが労務者より相当知識の程度の高い班長がよく事業主の気持ちなり、事業の様子なりを知って、自分の引き連れておる三十人なり五十人なりの者を、柔らかにまとめて行くという気持ちになればうまく行きます。

松本 確かにそう思いますね。ただボスの存在によって下手をすると却って健全な将来の発展が阻害されるおそれがあるのではないのでしょうか。

森 ですが、そこまで行かないと感情の共鳴が少ないと思います。

別役 労務管理は人です。人を得なければ、いかに施設がよくても駄目だと思えます。極端な例ですが、労務管理担当者が不精髭を生やしていたり、自分の身の整理ができていなかったりしたら、管理はできません。また担当者の家の女中がしょっちゅう変わっているのでは、その担当者移動防止をさせても無理です。正しい服装をして、爪もきちんと切っていて、不精髭も生やしていない、女中もいつまでも居ついている、というような人でなければ、労務管理担当の資格はありません。私は方々の工場を見にまわりますが、案内してくれる人の様子を見て、だいたいこの労務管理はこういう風だな、ということが分かります。自分が身汚くして、どうして整頓なんか指導できますか。どうしても人を得なければ、労務管理は駄目です。

農村の労務供出力

記者 だんだんお話を伺っていると、朝鮮も決して労力過剰どころではない。朝鮮自体でもそろそろ逼迫してきている上に、内地、満州にまで労働力を送り出さねばならぬとすると、益々足りなくなってくると思います。その場合に新しい給源をどこに求めるか。朝鮮には内地のように歴大な人的資源を擁する中小商工業がありませんし、結局まとまった労働力が必要とすればどうしても農村に期待するよりほかないでしょうが……。石井さんはいかがですか。

石井 朝鮮の人口のだいたい七、八割が農家なので、労務供出というとなすぐ農家が目当てにされます。それに以前は女が外に出て働くことがなかったので、女を動員すれば農村は労力が剩ってくるじゃないかと言われます。また内地ではだいたい一年に二百四、五十日働いておるのに、朝鮮は昭和十四、五年頃その半分しか働いていない。そうすると朝鮮の農家は遊んでいるのだ。それを引っ張り出したらよいではないかと言われていました。

ところが、最近のように食糧事情が逼迫して来ますと、農業も思い切った増産をやらなければならん。以前は肥料、農具が自由に手に入ったので人手が足りなくても、増収の方法がありました。ところが最近のように肥料もない、農具も手に入らぬとなると、増収の方法としては適期に作業する以外に手がなくなってきたのであります。ご承知のように朝鮮は雨がごく短期間にかたまって降りますので適期作業ということが非常に大事です。適期を外した場合にどのくらい減収するか申しますと、まず田植の場合には六月十日にやったのと二十日にやったのでは一割減る。三十日に植えると収量が三割減る、更に七月十日になると四割減、七月二十日になると半作以下になるのであります。麦刈にしても適期はだいたい出穂してから三十五日位です。かように非常に適期が短くて、その間に仕事をしなければならん。しかも麦刈と田植えの時期がいっしょ、稲刈と麦蒔の時期が一緒です。そうすると、その時期の間に作業をやるには、現在の農民の人口全部動員しても足りない。一年を通じて見ると遊んでおる人も多いようですが、農繁期には足りません。適期作業以外に増収の道がないとすれば、労務の供出は制限を受けてくるわけでありませう。

それで食糧増産をどうしてもやらなければならん。それが至上命令だとされておるならば、そう無闇な農村からの労務の供出はお断りしなければならんという状態になってきておるわけです。

記者 半島で婦人があまり仕事をしないのはどうしたわけですか。

石井 昔からの習慣でしょうね。

農村労務調査の要

山名 僕はこう言いたい。朝鮮の農家が三百万戸とすると女は少なくとも三百万人おる。とにかくこれを出して働かすことです。鉱山、工場に働いている者を帰すことは、その仕事を断続させることになるから、それはできない。また一番欲しい南鮮にはあまり工場、鉱山がないから、一層農繁期に帰すということは困難だ。そこで学生を動員する。法文科系統の学生は忠勇なる兵士となるか、産業戦士として働くか、しなければならんことになっているが、この法文科系統の学生及び初等学校、青年学校、中等学校全部で二百三、四十万位にはなるでしょう。これを農繁期には全部授業を全部止めて農村に動員する。そうすると、それを大人の労働力の二割と見ても、五十万人になる。新たに五十万人の働き手ができるとすれば、適期作業ができ、生産が減退させることはないと思うね。

石井 学生、生徒は、徴用して農村に持ってくるより工場に持って行くほうがよいの

ではないですか。

山名 ぼくの言うのは必要な時だけ使うという意味です。

石井 しかし、農業は誰にでもできると考え易いが、そうではないのです。田植えても一寸深く植えると、稲熱病が出て全滅する場合がありますから……。

山名 しかし航空機工業を始めとして、日本の産業規模を急速に三倍、四倍に拡充していかなければならぬ今日、その必要労力を他の剩っている所から持って来るということになる、結局朝鮮の農村にかかって来ざるを得ない。それはいかんからと言ってもはじまらんとする。要するに日本の産業規模を三倍、四倍にすることが動かすべからざる前提だとすると、結局朝鮮農村の適期作業の問題とぶつかって来る。そこで最後は女を全的に働かせ、学生はその期間学校に置かぬという風にするより方法がないと思うのです。

森 朝鮮の女は使いようによっては相当働きます。一体土建労働に女が出るかなんて言われていたんですが、慶北の榮州郡の鉄道工事のときには、女がたくさん出て働いた。仕事はグリを運ぶとか、トロリーを押すときにやるコザコザしたのですが……。また他の鉄道工事にも女がたくさん出て働きました。私は奨励の仕方では相当働くと思いますね。

石井 農繁期には女もみんな引っ張り出して、なお足りないんですよ。

森 それはそうでしょう。土建の方では農繁期には帰すということを奨励しています。

田原 そこですよ内地と違う点は……。内地では東京とか、大阪とか、九州、名古屋というような、人口の稠密した方面に工場が分散しているので、農村から労力を集めても、農繁期には帰すことが出来ます。ところが朝鮮はそうじゃない。一キロ平方に百八十人とか五、六十人しか農業人口を持たない西北鮮に重化学工場が出来て、そこに南鮮から労力を持ってゆくものだから農繁期に帰すという訳にはゆかないのです。そこに朝鮮の労務調整のむづかしいところがあると思います。

山名 帰すということがむづかしいんだ。

とにかく内地の農村はいま女と年寄だけで七千万人の食糧を稼ぎ出している。それに朝鮮は二千四百万人の食糧を達者な男ばかりがいて作っているんだ。ここに問題があると思うね。それや気象の条件が違うという本質的な問題もあるが、それならその気象の条件に合うように、作物の種類を塩梅したらいいじゃないかと思う。そうすりゃ女と年寄りで、二千四百万人を賄ってゆくことができると思うがね。

労力供出の余地充分

庄田 農業には適期ということが非常に大事です。しかし、それも考えようで、適期を十日も二十日も遅れて植えなければならぬ場合は、それだけ苗も遅らせて作れば収量減は少なくなる。農業技術の研究は、まだまだ進む余地があると思います。が、同時に、その技術を受け入れるところの百姓の頭が問題です。朝鮮の百姓は内地のそれと違って、頭の程度が低く、内地のように、すぐ受け入れるほどにはなっていません。

総督府でご計画中の適正規模農家は、農業生産力を昂める上からいっても、今の労力供出の点から見ても非常に必要なことで、これなくしては朝鮮の農家も栄えませんね。そこで朝鮮の農家の規模は一体どのくらいが適正かという点につきましては、ご参考までに東拓の実例を申し上げてみましょう。現在東拓の所有地は五万五千町歩で、その中に二千の部落があります。そのうち優良部落と誇ってよいものが百五十ありますが、この優良部落の七、八割は一丁五反ないし一丁八段を耕作する専属小作です。これらの農家は裏作に紫雲英や裸麦を作っていますが、裸麦だけでも充分食糧が得られ、一戸当たりの農業収入は年平均二千四百円以上になっていますから相当ゆとりがある訳です。ところでこの農家の家族数は平均六人六分で、このうち農業従事者は約三人になっています。現在のところ家族労働だけでは足りず、反当たり四人の労力を外から入れています。ご承知の様に朝鮮農家の労働日数は内地よりもはるかに少なく、年に百三十日ぐらいですから、これをもう少し働かせ、またいい農具を持って行ってやらせれば、朝鮮でも一戸当たり一町六、七反を持ち、二毛作をやって三人でフルに働いたらやって行けるのではないかと思います。

石井 朝鮮の農家の労働日数は、内地に較べて、ひじょうに少ないように見えますが、これを稲作のみについて見ると、内地とそれほど差がありません。内地は農閑期に副業をやったり、堆肥を作ったりするがそれを朝鮮はそれをしないからです。

ところで庄田さんのお話のように労力問題と関連して、適期植え付けが遅れた場合、それに応じて苗を仕立てるとか、その他いろいろな技術的な対策も考えております。労力が足りないとばかり言わず、反面労力の節約も考えて頂きたいと思います。

別役 朝鮮ではまだ人口過剰時代のような人の使い方をしてしています。たとえば労務者係の養成にしても、頗る多数の人を使っています。それだけに朝鮮にはまだまだ労務者を出す余力があると思います。今われわれの目に見えているのは表面に現れている者だけで、地下に潜んでいる者はまだまだ豊富です。内地でしているだけの苦労を朝鮮でやれば、まだまだたくさん出てきますね。

記者 まだまだお伺いしたい点がございますが、だいぶ時間も経ちましたので、この辺で終わります。

どうもありがとうございました。